

多文化共生

ショッキンクな事件が続いている。広島的事件の容疑者がペルー人だったことから、在日外国人の中には、肩身の狭い思いや不安を感じている人も多いに違いない▼先日、東京の立川市で多文化共生フォーラムが開催された。「外国人市民の視点からのまちづくり」とのテーマで、NPO法人たちかわ多文化共生センターが主催（共催・立川市）したものだ▼多文化共生とは、*そのまま*な国籍・民族の出身者が、自分たちの文化を大切にしながら地域に参加することで、社会全体を豊かにしているという考え方である。「違いを豊かさに」。多くの考え方や生き方がぶつかり合い、融和していく方が文化は豊かになる▼フォーラムでは、四力国からのパネリストによる討議と、会場の参加者を交えた質問で熱くなった。

在住の外国人にとって何

が必要なのか、困ることなのか、何が一番うれしいことなのか、行政・市民は何ができるのか▼外国人を、単なる労働力としてのみ受け入れるなら、日本社会に不満を持つ外国人と、外国人に反感を持つ日本人を増やすだけだろう▼きょうは「世界人権デー」。求められる多文化共生の社会を目指す人道的なアプローチ。私たちSGIの運動のなかにも、そのヒントがあるように思えた。(2005・12)



人間としての証

極限の前で人間はどう振る舞えるか。先ごろ公開された映画『バルトの楽園』が一つの問いかけをしている▼第一次世界大戦時のこと。日本軍はドイツ極東拠点の中国・青島を制圧、4700人のドイツ兵が日本各地の捕虜収容所に送られた。徳島県鳴門市の坂東収容所では所長・松江豊寿が彼らを同じ人間として遇した▼音楽隊の結成やパンを作り、ビールを飲む自由も与えられた。彼らは地元民にドイツの文化と技術を伝える役目を担わされる。交流を通じて、住民からも親しまれる存在となっていく▼戦争が終結。祖国に帰ることを前にベートーベンの「第九」を演奏した。それは日本で初演であった。映画では、軍上層部の圧力に屈しなかった松江の言動、敵を殺せなかった

兵士の心の葛藤も。



り、国民であろうとする
と「非人間」になる。▼罵
られてもなお、人間とし
ての信念に生きること
を選んだ人々。その輝きは
不滅である。(2006・6)

▼英国作家ヒルトンの『チップス先生さようなら』は、英国の百年前の伝統的な中学校を舞台にした物語だ。ブルックフィールド中学校で同僚だった元教師だったドイツ人が母国に帰った後、戦死したとの報が入った▼日曜礼拝の場でチップス先生は、敵であった死者に対しても哀悼の意を述べた。案の定、それに異論を唱える人も出てきた。「わが国の戦死者と一緒にするのはおかしい。敵じゃないか!」▼第二次世界大戦時。ヒトラーの弾圧から逃げてきたユダヤ人に、リトアニアで命のビザ”を発行した杉原千畝の勇気。人間であるうとすると「非国民」にな